



【イエスのように仕える者になる】

聖書:ヨハネの福音書13章1～5節、14-17節、暗唱聖句:マタイの福音書20章28節

説教者: 鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズの信仰の家族のみなさん! 一週間の間もお元気でしたか。

6月の初の主日礼拝となりました。まず、今日まで歩いて来られた教会の家族にお互いにまず、挨拶を交わしましょうか。“あなたにいつも感謝しています。あなたはとても大切な人です。”、“あなたは素晴らしい存在です。”今年もここまでそれぞれ任された事に、精一杯仕えて来た、みなさんの上に神様からの大なる慰めと祝福が雨のように豊かに注がれますように主イエスの御名によって祝福します。アーメン!

<1. 仕える為に来られたイエス・キリスト>

今日の本文はイエス様が弟子たちの足を洗って下さる有名な場面です。十字架を背負う最後の瞬間までイエス様の心を支配していた有る一関心事はご自分の死や苦しみなどではなく、愛する人々への仕えることでした。仕える姿はイエス様のきよい習慣であり、目立つ生き方だったのです。

今日の本文でまず、一緒に考えてみる場合があります。はたして、イエス様が弟子たちに仕えてことは今回だけの一回性イベントだったのか、まことのイエス様の人生のスタイルだったのかです。

今日の本文、**ヨハネの福音書13章1節**をもう一度見て見ましょう。

「さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」

この世を去って父のみもとにお帰りになる時が来たことを知っておられ、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛の残るところなく示されたのです。(新改訳3版)

この世に来られたイエス様は人々を愛され、罪の中にいる人々の救いの為、民の上から君臨されたのではなく、すべての愛を尽くし、仕える姿を持っておられたお方であることが分かります。

よく知られている**マルコの福音書10章45節**を読んでみましょうか。

「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

ここで“人の子が来たのも”という表現はイエス様がこの来られた目的と使命をよく表わしています。

我らは前回この地上でのイエス様がなされた尊い習慣や大事になされた行いと生き方について話した時、サマリアの一人の女を見出し、救い出して下さったイエスキリストの姿を通して、この地に来られたイエス様の一番大切な使命と関心事は、失われた魂を探し出して救うことであることを申し上げました。

ところが、今日の箇所によると、**神の御子であられ、救い主であられるイエス様は、その救いの御業を全うするために、すべての成し遂げるために、イエス様は愛を持って、ひたすら、しもべのように仕えて下さったお方**であることが分かります。

ですから、**このイエスキリストの姿を通して、大事に教えられることは、人の救いと仕えることとは切り離すことが出来ないものであり、人の救いを望むなら、愛の仕えが伴わなければならないこと**を、大切に覚えておきたいと願います。

愛する信仰の家族のみなさん! **仕えることの核心**はなんでしょうか。

仕えることとは結局、**仕えられる対象に対して最善の有益(ゆうえき)を求め**ることではないでしょうか。

この世に来られた主イエスキリストは人類に対する最善の有益である神の救いを得られるように仕え続けて下さった愛のしもべの姿が目立ちます。

そういうわけで、我々に仕えて、救うためにご自身の命をあがないのいけにえとしてささげようとされたのです。

イエス様はこう言われました。ルカの福音書22章27節「**食卓に着く人と給仕(きゅうじ)する者と、どちらが偉いでしょうか。食卓に着く人ではありませんか。しかし、わたしはあなたがたの間で、給仕する者のようにしています。」**

もう一度、**マタイの福音書20章28節**にも「**人の子が、仕えられるためではなく、仕えるために、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」**

そうです。イエス様が来られた目的は罪の中にいる人生を救うために、ひたすら愛のすもべとして**仕える姿**取って来られ、その**仕えることの絶頂(ぜっちょう)がまさに十字架の上でご自分の命までささげられたこと**であり、

その結果が多くの人類は、そのイエスキリストが自分の代わりに自分の罪の代価として払うべきすべての犠牲まで、支払い済みとなって下さったことにより、その真実を信じて、イエスを見上げ、頼るすべての人々に神の救いをもたらし、お与えになられたわけでありませう。

今日の御言葉で、イエスキリストは十字架の前の大事な時期に、すべてを尽くして愛しておられた弟子たちに、仕えることを通して、とても大事なことを教えようとしたことが分かります。そして、これから弟子たちも仕えることとはすぐ命をささげるほどの大したことではなく、些細な事からできるようにイエス様は弟子たちに模範を見せて下さいました。そういうわけで手ぬぐいのタオルとたらいをもって弟子たちの足を洗われたのです。

<2. 愛による仕えるの模範となられたイエス・キリスト>

今日の本文をもっと注意深く読みながら黙想して見ると、私は最初イエス様は弟子たちの中でだれかが足を洗ってあげてを望み待てておられたのではないかと思います。

足を洗うということはユダヤ人の慣習によると、イエス様の当時、サンダルが入っていた時代なので、家に入る時、足を洗う、特にお客さんが見えた時には足を洗ってあげるのが当然な礼儀でした。そのため、家の門のそばには、水がめとたらいを用意され、特に大事なお客さんが来ると当然洗ってあげることが風習でした。ところが、弟子たちの誰ひとりもそれには気を使わなかったように見えます。

本文ヨハネの福音書13章2節は「夕食の間のこと(夕食の間のことであった)」と書かれています。

実は、足を洗うことは家に入る時、あるいは夕食の食前に行われるべきことでした。

しかし、弟子たちの中で、だれも大事なイエス様の足を洗ってあげたり、他の弟子たちの足が洗われてないことに無関心でした。当然やるべき気配りや心遣いをする人がいなかったのです。みんな夕食の前だったから腹がへって、ひもじくなっていたので、他にまったく関心がなかったかも知れません。

今までずっと仕え続けて下さったイエス様はこの時に、もしかして、弟子たちのだれかが自ら仕えてくれるのを待てておられたかも知れません。しかし、夕食が始まっても、弟子たちの姿が自分のお腹が満腹になることだけに夢中になっていた弟子たちの姿をご覧になったでしょうか。イエス様は夕食の途中(とちゅう)で起き上がりました。当然、夕食はまだ、終わってないままだったかも知れません。

しかし、イエス様はさきに、この大切なチャンスを見逃しませんでした。そして、弟子たちの足を洗って下さった後に、イエス様はご自身の本音をこう語って下さいました。本文15節です。

「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。」

イエス様の仕える「**模範(example)**」を示された！

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！

ここで「**模範**」の意味は何ですか。だれかが、そのように真似をして、そのように従って出来るようにすることではありませんか。ここでだれかはだれでしょうか。イエス様の弟子たちであります！弟子というのは「見せてもらって、学んでそのように従って行う者(follower)」という意味です。

ですから、今日私たちも、自分がイエス様の弟子だと思い信じているのであれば、イエスキリストの仕える模範に従って真似をし、そのように行うことが伴うべきではないでしょうか。

しかし、なぜ、我らはなかなかイエス様のように愛の仕えが先にならず、続けられないのでしょうか。

罪ある我らすべての人は、絶えず先に自己中心なので、仕えるより仕えられるのを望み、喜ぶからでしょう。他人より、自分の利益を先に求め、自己中な自分の思いや計算が早く先になるので、自分が仕え続ける疲れやそのための自己犠牲を払うのが損だと思込んでいるからではないでしょうか。

実は、我らはみんなこの世の価値観や教えばかり受けたので、仕える立場は弱い存在で、不幸な人生かのように、仕えられるのが人生の成功で、それがまことの幸せかのようにそのように盲目的に偏って信じ込んでいるところがあるのではないのでしょうか。

しかし、今日のイエス様の姿は我らにこの世の価値観と教えと真逆のことを教えて下さっています！

神の愛を持って仕える人生、だれかの為に、仕えるために用いられる人生こそ、幸いであり、祝福された人生で、さらに価値ある人生だにご自身の模範を通して教えて下さっているのです。

ですから、心からイエスキリストを愛し、信じているクリスチャンであり、キリストの弟子だとみなさんが言えるなら、愛の仕える基準が自分感情・やる気ではなく、ひたすらイエスキリストの模範をいつも基準とし、そのよう

に従って守り行うことが大事だと信じます！

そうする方々は、今日もイエス様の愛の心臓を保ち、イエスの代わりに小さいイエスとなって、愛のイエスの手足となって、イエス様が表わしてくださったその愛の仕えの模範のように仕え続けようとする信じます！そして、その基準と土台の上にはっきり立って行った時こそ、揺るがず、波なく一貫的な愛の仕えが続けられると信じます！イエスキリストの仕えの行いはすべて愛が動機でした！弟子のひとりひとりがどんなに弱くても、足りなくとも、変わらず自己中であっても、イエス様は愛することは仕えることであることであり、愛の仕えこそ、人を変える、人を救いに導くことが出来るのを教えて下さっています。

もう一度今日の本文2節を見れば、夕食の間、イエス様が弟子たちの足を洗って下さる前に、一つ出来事がありました。「夕食の間のこと、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを裏切ろうとする思いを入れていた。」

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！この箇所を通して教えられることは何でしょうか。イエス様の弟子たちの中、過度にお金が好きで、いつかイエス様に残念な気持ち、恨みの心を持っていたイスカリオテ・ユダの心と心の隙間に、イエス様を裏切ろうとする思いを悪魔は入れてしまいました。

今イエス様と弟子たちが一緒にいた時さえも、イエス様の弟子であってもですね。

そうであるならば、日々日常の生活の時に、また牧場や交われる時にも、自身やみんなの心と思いが守られるようにいつも祈らなければならないのを教えられます。

ところが、ここで、我々がさらに注目すべきところは、そのすべてを知っておられたのにもかかわらず、イエス様がまもなく、自分を裏切るイスカリオテ・ユダさえも関係なく、他の弟子たちと等しく、同じように、彼の足も洗って下さるイエスの仕えの姿ではないでしょうか。イエスキリスト自身を裏切り、大きな罪を犯してしまう者であっても最後まで等しく愛されたので、イエスは、その変わらない愛を持って仕え続けて下さいました。

ですから、愛のない仕えは、イエスが模範として見せて下さった愛の仕えの姿ではないことをともに覚えましょう。仕える時に、時には自分だけが仕え続けているような気がして疲れはててしまったり、自分が多く犠牲を払い、苦しみを受ける時もありますね。私たちがイエス様のように、差別なく、区別なく、一貫した愛の仕えが続けられるためには、必ずイエスキリストの愛の仕えの模範を基準とし、キリストの愛でいつも充電させて、キリストの愛につながれていなければ、自分のやる気や心だけでは不十分であることを忘れないで頂きたいと思います。

第一ペテロの手紙2章21節にはこう書かれています。

「このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。」

イエス様の模範の残して下さった理由と目的について、今日聖書にイエスキリストの愛の仕えの模範が書き記され残されたのは、ただ読み内容ではなく、我らみんながイエスキリストの代わりに、そのイエスキリストの足跡に従い、イエス様のように行うことが出来るようにするために模範を残して下さったことが分かります。

今日の本文14-15節・17節と一緒に読んで見ましょう。

「14主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。15わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。17これらのことが分かっているなら、そして、それを行うなら、あなたがたは幸いです。」

<3. 謙遜になられ仕えられたイエス・キリスト>

(聖書の謙遜の意味:「謙遜」はヘブル語で「アナウ」という言葉で「低くされる、苦しみを受ける」など意味・もう一つ、「謙遜」と言葉についてラテン語では「フ・ミリタス(humilitas;英humility)」と言う言葉・この単語の語源は、「フ・ムス(humus)」つまり、「地」を意味する言葉から始まった。)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！今日我々もイエス様の仕えの模範の姿を真似をし、仕え続ける為には、愛がなければならぬことで、その愛は自分からではなく、キリストからの愛の力、源で続けられることを学ばされました。

しかし、もう一つイエスキリストの愛の仕えが地上での生涯を通して続けられたのは、イエスキリストの謙遜がなければ決して不可能なことだったことでしょう。

今日の本文で、イエス様は弟子たちの汚い足を洗うためには、愛とともに、ご自身を低くさせ、自らひざまづく

謙遜が伴って行われたことであることが分かります。イエス様の姿には真の謙遜がありました！この地上での馬小屋でのご誕生から、十字架につけられて死なれるまでイエス様がこの地上で最後まで仕え続けることが出来たのは、その根拠にはイエスキリストの謙遜が秘められていたからではないでしょうか。イエスキリストの謙遜と仕えはつながっており、一つであることを教えられています。

ピリピ人への手紙2章3-9節で、「3何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。4それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。5キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。6キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、7ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、8自ら低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。9それゆえ、神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。」
この地に來られたイエス様、その方の生き方のもとは何だったのでしょうか。そうです。謙遜でした！
ご自身を低くさせたイエス様のその謙遜は具体的に「**仕える姿、従う姿**」であられました。

イエス様は神様なのに、神様のあり方を捨てることをおしらず、むしろ自分を空しくし、無にして人と同じようになられ、死にまで従い、実に十字架の死にまで従われました。イエス様は真の神様であられるお方でした。しかし、神様が罪人を救うために、罪人と同じような姿となりました。そこで終わったのではなく、その罪人たちを愛するがゆえに地上で仕えて下さっただけではなく、人の全ての罪の代価として、ご自身を十字架にまでつけさせ、死なれるまで神のご計画に従われたのです。

この本文の一番大切な単語があればそれは「**空しく(無)して**」という単語だと思います。
結局神様であられたイエス様が自ら自分を空しくして、一番低い者、しもべの姿となられ、仕え続け、死にまで従われたイエス様の謙遜な姿であったことを教えられます。イエス様の人生は、高いところへではなく、一番低い方向へと向かわれていました！

そのイエス様がヨハネの福音書13章イエス様は愛の残るところなく、人を愛し、最後まで仕えて下さいました。十字架にかかる前日、御自分が座るべき席に弟子たちを座らせ、むしろ腰をまげ、ひざまずいて弟子たちの足を洗われました。そして、そのイエス様は我々のために惜しみなく命まで捨てながら、最後まで従われました。まさにすべてご自身を無にさせたのです。この地に來られたイエス様の人生は**謙遜そのものであり、仕える、従う生涯**でした。イエス様がこの地に來られ、表してくださった核心価値(core Value)は**謙遜(仕える、従う)しもべの姿**でした。

愛する神の家族のみなさん！人間の最大の問題は高ぶり、高慢なのです。

人は無意識の中、本能的に自分が神のように高くなろうとします。すべての人を裏で自分で判断し、すべてのことに自己中心で、自分の心、思い、経験、自分の基準がすべて正しいとそれに合わせようとする高慢さが我々にあるのではないのでしょうか。

そのような人々は表ではたえず自分の長所と他の人の短所を比較しながら、自分がかかなり偉そうに考え込んでいるが、心の奥底では自分の短所と他の人の長所を絶えず比較しながら自分をますます苦しめていってしまいます。そのような人は決してへりくだって仕えることができません。

*アウグスティヌスは人の高慢についてこう言いました。

“**自分はもう謙遜だと思ふことこそが高慢である**”と答えたそうです。

自分が謙遜だと思ふ瞬間、その人はすでに謙遜を失ってしまうという素晴らしい指摘でした。

*祈りの人ジョージ・ミュラー先生が設立した孤児院の園長フレド・バーガー先生は、高慢について、こう言われました。“神は人が小さすぎて用いられないのではなく、大きすぎて用いられないのだ。

人が神の御前で高ぶっているため、さらに用いられないことを指摘したとても正しい言葉だと思います。

神様は我々が根本的に変えられることを望んでおられます。

まことのキリストの弟子たち、クリスチャンたちは、イエス様のように神を愛し、神の御前でいつもへり下さりまた柔和で、自分を低くし、謙遜な者となって人に仕えます。

自分を低くし、謙遜な人だけがイエス様のように仕える人生を送ることができます。

イエスキリストは謙遜もご自身に学んで、謙遜になるように勧めて下さっています。

「わたしは**心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。**

そうすれば、たましいに安らぎを得ます。(マタイの福音書11:29)」

愛する信仰の家族みなさん！仕えることは選択肢ではなく、主の命令なのです。

自分がやる気がある時、時間の余裕がある時、気分がいい時やって、そうじゃない時はやらなくてもいいや！
っとすることではありません。主イエスキリストが直接模範として見せながら、我々もそのように従えるように命令して下さったことでした。

今日の本文ヨハネの福音書13章14節をみてください。

「14主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、**あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。**」

みなさん、仕えることはイエスキリストを主として告白する人々への神様の命令です。

そうするのであれば、我々の選択は一つです。どうやってイエスキリストの模範のように従えるのか、行えるのです。

‘私はすでに引退したのだから..’と思われる年寄りの方々の中で私はもう仕える状況と力がないと思われる方が我々の教会にはいらっしやらないことを本当に感謝しております。

いつかみなさんにも申しましたが、引退(retirement)の本来の意味は「タイヤを新しく取り替えてふたたび走る」という意味です。ですから、まだ健康であるならば、その健康と愛をあなたがたを必要としているところに行ってもう一度、仕えてみませんか。

アッシシの聖者と呼ばれていたフランシスコ(Francis)がラベルナー山でささげた有名な祈りはいまでも残って伝えられています。“主よ。私は主のように仕えながら苦しみを受けたことはありません。私の体にはくぎの痕(あと)がありません。私にも主の苦難を知らせてください。”どれだけ切に祈ったのか、神様は彼の祈りの答えとして彼の手と足に5箇所のかぎの痕ができたそうです。我々もキリストの愛と謙遜を身につけて、一人一人がイエスキリストの手足となり、イエスキリストがなされたようにすべての人々の救いの為にキリストの愛を持って仕えているうちにまただれかに良き模範となり、神に益々豊かに用いられる我々となりますように切に祈ります。

我らの主イエスキリストは天の王座を捨てて、しもべのようにこの地に来られました。そして、神様の御子イエスキリストがご自分の愛の残るところなく、すべてを与え、弟子たちはじめ、すべての人々にへりくだって仕えて下さったのなら、我々もイエスキリストの弟子となり、一人一人の尊い魂の救いのために惜しまずに与え仕えて下さったイエスキリストのように我々も教会ら上着をぬいで、タオルをもって仕えようと決心しようではありませんか。これから残りの我らの人生、仕えられる者より、イエスの手足となって仕える者として生かされ、大いに用いられるクリスチャンプレイズチャーチの全信仰の家族となりますよう主イエスキリストの御名によって祝福します！ アーメン！